

佳作

祖父の田畑

東京都 中央大学高等学校二年 伊藤 遼太

夏、空に広がる蝉の声。うるさいはずのその声が耳に馴染んで子守唄となっていた。

母に起こされ目が覚める。祖母の黒いワンボックスカーは、日に照らされながらも、内部は冷房で冷やされていた。だから気持ちがよくて寝てしまったんだと思う。「まったく小学四年生にもなってる。」

祖母はそう言ったつきり、何も言わずに外へ出た。なにも怒っているのではない、なぜか元気がないのだ。その証拠に祖母の声はまるで騒ぎたくない、どこか気分が減入っているようないつもとは違う祖母がいた。

私はひとり車に残り、自分の体を軽く動かした。まだ眠気が残っていたが、外の熱が冷房の止まった内部を静かに熱していたので、そそくさと私は外に出た。

蝉のうるさい声が耳に戻ってきた。奴らは喉が枯れないのかと思いつつながら、私はここがどこかを理解したのだった。

玄関で叔父に出迎えられた。

「よう、小学生、元気か。」

多分これくらい呼びかけだったと思う。ひどく疲れていながらの笑顔に、私は

「こんにちは。」

と声をかけた。今思えば何故あの時、叔父の顔を見ていたのだろうか。それは、単に行儀がいいからではなく、叔父の声がいつもと違うなど直感したからだ。その声はやっぱり私にいつもとは違うことを知らせていた。

叔父たちの木造の家は懐かしい木の匂いが漂っていた。私はこの匂いが好きだ。良い木の匂いを私は自分の体に巡らせて、中へと入った。

大勢の人が中に居た。皆黒いスーツをピシッと着て静かに座っていた。それが喪服だと後になって分かった。皆は静かだったが外では蝉がしきりに鳴いていた。

「顔を見てきなさい。」

母は私にそう言って、私は母の見ている先に目を向けた。薄白く銀色が少しかかった私よりも大きな箱があった。私は中をのぞいた。

曾祖母が、そこにいた。

私と曾祖母はあまり面識がなかった。保育園に居た頃は年に四、五回来ていたが、ほとんどの時間を叔父や従兄弟と過ごしていたし、曾祖母とはしっかり話をしたことはなかった。でも曾祖母は皆に優しい人だったから、こんな私にも優しく接していた記憶がある。

私は曾祖母の顔を見て、とても違和感を感じていた。まるで生きていくくらい、きれいないつもの顔だったからである。

私は泣かなかった。大きな悲しみも持たなかつた。それにはたしかに、あまり面識がなく思い出がなかつたからという理由もないわけではなかつた。だがそれよりも面識がほとんどないのに、悲しまれても、例え自分の親族や子孫であっても、曾祖母はその悲しみを受けとってくれるのだろうか。逆に今、悲しい顔をするのは、曾祖母に対して失礼に値するのではないだろうか。と思つたのが、曾祖母に会い、咄嗟に行動した理由である。

お経を読み終えるまで、私は周りの人の様子を窺っていた。蝉がひとり空の下、静かに鳴いていた。

叔父が手紙を持ち出した。遺書というものだった。が、叔父の持つ叔父宛てのそれはまさしく手紙だった。叔父が手紙を読む間、私は黙ってそれを聞いていた。

始めに、急に亡くなることへのお詫び、そこからは曾祖父の思ひ出話から感謝の言葉まで全て優しい口調で綴られていた。

「困った時、何か助けを求めたい時、元気がない時、何かあったらうちの田んぼを眺めなさい。」

曾祖母はありがとうと続け手紙を書き終えていた。叔父は少し元気になったような顔だった。夕暮れなのに蝉が鳴いていたのを覚えている。

あれから一年ばかり経って、私はお墓の前に行った。このお墓の中に何が入っているのか、そしてそれが何を意味しているのかはもう分かっている。そう確かめお墓を後にする。

そのとき、叔父は私を別の場所へ連れていった。そこで叔父は言った。

「一面、うちの田んぼだ。」

「あの田んぼだ」と私は直感した。そして私は夕日に照らされ輝く稲達とそのはるかに大きい田んぼに鳥肌が立った。

広く、大きな田んぼ。大昔から幾代か続く高貴な田んぼはまさしく曾祖母の意志であり魂だと私はそこから吹く風を受け、体で感じていた。これからもこの田んぼは永遠に日の光に照らされながら、輝き続けるだろう。

蝉がいやというほど鳴き叫び、何度か風に声が流されながらも、必死になっている中、私は叔父のサンダルを履いて歩く。小四のあの頃とは違って高二の私の足は随分と大きくなり、様々なことを学んで知っている。目的地に着いたら、手を合わせ、目を瞑る。

私は今でも忘れない。あの時この田んぼを見た時の感情を。あれは、「感動」だった。